

日本無政府共產黨

目次

まえがき

I

日本無政府共産党……………相沢尚夫…11

黒旗は破れた……………真木 泉(植村諦)…131

II

日本無政府共産党テーゼ……………165

プロレタリアの戦略戦術……………211

解説 社会革命派の誕生……………蓮台寺晋…239

私の回想は、四〇年も前のことであるから記憶違いや忘れたこともあるだろうが、訂正の手がかりはもはやない。資料もここに収録したもの以外には、今後発見されることもないだろう。これを今読み返してみると、これは誤りだなとか、ここはもつと深く掘り下げるべきだろうとか、もう少し上手な表現を使ったらよかつたらうとか、幾多の欠陥が目につく。また時代おくれになった部分も少なからずあるように思える。しかし当時われが指向した方向は大筋としては、今日でも誤りではないように思われるのである。

過去の革命の歴史を検討してみて気付くことは、革命は常にアナキズムを指向して勃発しているということである。ところが革命が経過するにつれて少数の人々の手中に国家権力が握られて、革命の生命はその時から衰弱し、遂には死んでしまうのである。フランス革命もロシア革命もスペイン革命でも同じことが言える。またパリ・コンミュン以後に起った革命は、それが真の人民革命であつた場合には、常にパリ・コンミュンが想起された。何故だろうか。パリ・コンミュンが国家権力を樹立したのではなくて、人民の全権を樹立したはじめての革命であつたからではないだろうか。パリ・コンミュンについてはマルクスの著書が有名である。マルクス主義者レ

ーニン、パリ・コンミュンは国家とは異なる何者かだつたとのマルクスの解明に同調して、それは死滅しつつある国家、半国家だと言明した。それはコンミュンだつたのだ。ところがレーニンは死滅しつつある国家には共産党独裁が必要だと確信していた。そのために彼は死ぬまで戦わねばならなかつた官僚主義を生みだした国家をつくってしまったのだ。そしてスターリン主義に路を開いた。それはともかく、私は人民の全権の樹立が革命の第一歩だと考えていたし、今も考えている。人民の全権を維持するためには、アナキストの勝利が不可欠だと考えた日本無政府共産党は人民の全権を如何にして維持し、如何にして賃労働を廃止し、自由人の自由連合社会へ移行するかという問題にとり組んでいたのである。この大筋は正しいと考えるのである。

歴史上にそんな試みがなされたことがなかつた訳ではなかつた。クロンシュタットに自由ソヴェトの旗を掲げた水兵と労働者、マフノとウクライナの農民、ボルシェヴィキのなかの労働者反対派、そしてスペインのCNT || FAIの労働者と農民などの闘争は、人民の全権の樹立と維持のために戦つたのであつたが、いづれも国家権力の砲火によって敗北を喫した。

スペインの労働者と農民の革命的闘争が共産党によって弾圧されると、ファシズムに対する防壁もまた崩壊した。そして世界戦争が起つた。戦争はブルジョア民主主義の勝利に終つた。

言うまでもなく資本主義は賃労働による商品生産、利潤追求を原則とした経済である。現代の資本主義は企業の社会的責任等という道徳家面をしたりするが、本質的に私利私欲の追求である

ことには何の変わりもない。ただ前時代の資本主義が労働運動を弾圧して、労働者を低賃金に抑えておくことで利潤を獲得していたのに、現代の資本主義は労働運動を露骨に弾圧するよりも体制に組み込む方が利益があることに気付いている。生産原価に組み込める範囲での賃金の上昇については、労働組合幹部との平和的協議を歓迎する。賃金の上昇は商品販売力の拡大と上昇となって企業の利益と結びつくと共に、労働者にプチブル精神を芽生えさせて反逆の精神を眠り込ませる効果があり、知的水準の向上にも役立ち、それは技術の向上ともなっており、これもまた企業にとっては利益をもたらすことになるからである。このため大企業は従業員を全生活を管理（労働時間中はコンベヤー・システムにより、自由時間は住宅、レジャー設備等によって）し、従業員に企業との運命共同体的観念を植え付けることに全力を傾けている。大企業支配のブルジョア民主主義は、資本主義の枠を踏みはずさない限り言論、出版、集会、結社の自由を認める。これに反する者に対しては反撃の姿勢をさえ見せるのである。こうして革新団体（政党、労働組合等）をも体制に組み入れた。

けれども労働者の知的水準の向上は、他方では労働者に経営、生産、販売等々の諸行為に参加したいという意欲を生みだした。全生活を管理されているという息苦しさをも自覚させた。スターリン主義の極端な管理体制の暴露は、社会主義とは工場の経営者が株式会社から国家に変わるだけで、管理体制には変りはないのではないかという社会主義への不信と新しい解放運動への

模索を生んだ。この模索がハンガリアとチェコ・スロバキアでは暴動となった。ユーゴ・スラビアではマルクス主義とブルードンとの結合が真剣に検討されている。そして先進工業国フランスでは、一九六八年五月にパリの学生が大学紛争を契機として、管理体制に反対して、何人にも支配されない自主独立の人間の社会を求める声を挙げた。これに同調した労働組合の下部大衆はゼネストに立ち上がった。この五月革命は従前の革命運動の型を破って、新しい方向を創造し示唆した。彼らは完全な言論の自由による直接民主主義と労働者の自主管理とを打ち出した。これこそ第一インターナショナルが掲げた「労働者の解放は労働者自身の仕事である」という主張の、「労働者自身の仕事」の具体化であった。それはアナルコ・サンジカリズムの主張と内容的にはほぼ一致する。ただ異なるのは、アナキズムとマルクス主義との公然たる握手であり、この二つの対立物の総合への展望であった。日本無政府共産党の未熟さは、この展望に立ちながら、充分意識的に理論化していない点にあった。